

東京都における母親の呼称の時代変化と加齢変化

尾崎喜光

1. はじめに

日本語の親族呼称は多様性に富み、加えて時代による変化や家庭内での個人の立場の変化に伴う加齢変化も見られることから研究対象とされることが多い。特にこうした特徴が希薄な言語や日本語と異なる親族呼称の体系・運用を持つ言語を母語とする外国人研究者には日本語の大きな特徴の一つと映るためか、自称詞や対称詞等の人称詞まで含め、研究対象とすることが少なくないようである。

筆者も親族呼称の多様性や変化に関心を持つ一人であることから、札幌市および岡山市において無作為抽出多人数調査を実施した。その結果、本稿で論じる母親の呼称については次の知見を得た(尾崎喜光2018)。

札幌市で1985年に調査したところ、小学生の男児における呼称は昭和30年代から昭和40年代にかけて「かーさん」から「おかーさん」に変化したと考えられること、女兒では「ママ」が一時期増加したもののその後は大きな勢力とならず大勢は男児と同様であること、また男性の中には成人になる過程で「おかーさん」から「かーさん」や「おふくろ」に置き換える形での加齢変化も認められること等を報告した。

また、岡山市で2013年に調査したところ、「おかーさん」が最も多く約半数が用いていること、小学生の児童における呼称は「おかーちゃん」から「おかーさん」に変化したと考えられること、また「おかーちゃん」には成人になる過程で使わなくなるという形での加齢変化が認められること等を報告した。

調査対象地域はいずれも地方都市である。これはこれで地域的な多様性の一端を明らかにするという点で有益であるが、これらに加え、日本の社会的・経済的な中心地であり、日本の人口のおよそ1割を占め、共通語の基盤ともなっている東京都での状況を明らかにすることもまた重要である。

そこで本稿では、東京都内在住者を対象に最近実施した無作為抽出多人数調査の結果を分析することでこの点を明らかにする。

なお、父母や祖父母の呼称については、知らない大人に対して言うときの「ちち」「はは」等の使用や習得という観点からも注目される。アンケート調査にもとづく先駆的な実証研究としては柴田武・鈴木たか(1959)がよく知られているが、本稿では母親本人に呼びかける時の家庭内での呼称を研究対象とする。

2. 調査概要

本稿で示す東京都内在住者の調査データは、次の方法により得たものである。筆者が研究代表をつとめる科学研究費補助金による共同研究の一環として実施した調査であるが^(註)、本稿で論じる調査項目は筆者の提案によるものである。

- (1) 調査地域：東京都全域(ただし島嶼部を除く)

- (2) 調査対象：20歳～69歳の男女個人
- (3) 抽出方法：エリアサンプリングによる無作為抽出法
- (4) 回答者数：1,049人（地点数は100地点）
- (5) 調査方法：調査会社の調査員による個別訪問面接法
- (6) 調査期間：2018年10月～2019年3月

本稿では、東京都出身者のみを抽出とした分析も一部行う。それ以外の分析においても回答者の出身地を把握しておくことは有益である。

そこで、回答者の出身地（生まれた都道府県）について構成比により示すと図1のとおりである。なお、「九州」には沖縄県を含む。

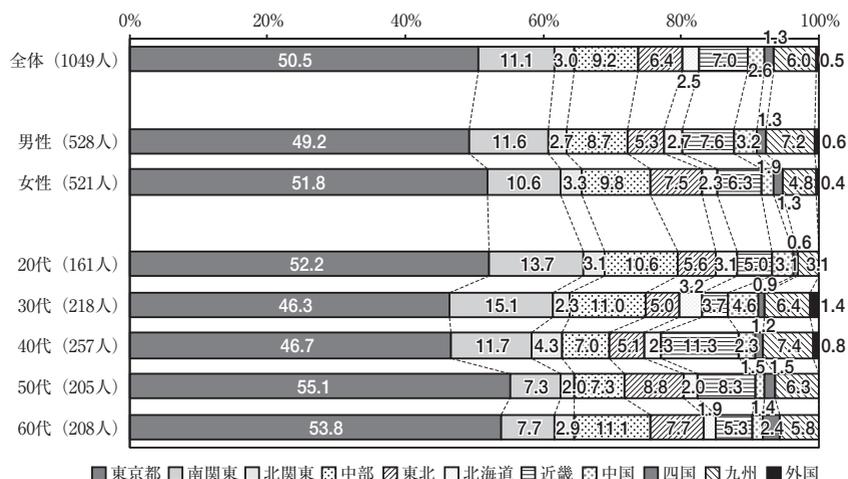


図1 回答者の出身地

グラフ最上部の「全体」によると、東京都出身者が50.5%とほぼ半数を占めていることがわかる。東京都に隣接し日々の往来も多い南関東（東京都を除く埼玉県・千葉県・神奈川県）出身者は11.1%であり他の地域と比べると多く、東京都と合わせた「首都圏」出身者は全体の約6割となる。これに対し北関東出身者は3.0%と少ない。関東に隣接する中部出身者は9.2%と一定の割合いる。さらに東北6.4%、北海道2.5%であり、以上の東日本で全体の約8割を占める。すなわち、回答者の出身地については、東京都が全体の約半数、首都圏にまで広げると約6割、さらに東日本にまで広げると約8割ということになる。残りの約2割は西日本出身者であるが、この中では近畿7.0%、九州6.0%が多く、中国2.6%、四国1.3%は少ない。

男女別に見ると、男女で大きな違いはない。東京都出身者は男性も女性もおおよそ5割である。九州出身者は女性よりも男性にやや多い点、逆に東北出身者は男性よりも女性にやや多い点が異なりとして注目される。

年齢層別に見ても大きな違いはなく、東京都出身者がいずれもおおよそ半数を占める。ただし、50代・60代では東京都出身者が55%前後とやや多いのに対し、30代・40代はこれから1割ほど低い約46%となる。もっとも、それよりも若い20代は、就職等に伴う転入者が相対的にまだ少ない年齢層であるためか、東京都出身者は50%を越える。年齢層別に見ての異なりとしては、南関東出身者は30代でやや多い点、近畿出身者は40代でやや多い点、九州出身者は20代では少ない点などが注目される。

3. 分析

3.1. 設問

調査では、現在における母親の呼称（呼びかけとしての呼称）に加え、子供の頃の呼称についても回答を求めた。後者の回答を年齢層別に分析することで、子供が用いる母親の呼称の時代変化を把握することとした。これは筆者が1985年に札幌市で行なった調査方法であり、井上史雄（2015）はこれを「記憶想起技法」と名づけている。なお「子供の頃」と言っても時間の幅があることから、回答者の多くが明確に思い出せるであろう年齢ということも考慮し「小学生くらいのとき」と指定した。

質問文と選択肢は次のとおりである。最初に子供の頃の呼称について、次いで現在の呼称について回答を求めた。回答者にはこれらの選択肢が書かれた「回答票」を手元に置いてもらい、該当する表現を選んでもらった。回答者が使う表現は一つとは限らないことから、該当する表現を全て選ぶことを求めた（質問文末尾の「(M. A.)」とは「複数回答可」の意味)。「どれも言わない」は回答票にはなく調査票のみにある。回答者がどれも選ばなかった場合、チェックがどこにも付かないことになるが、調査員のチェック漏れではないことを積極的にマークするためにこれを追加してチェックさせた。ただし該当者は1.4%に過ぎず、ほぼ全員が少なくともいずれか一つは選んだ。

(7) 小学生くらいのときですが、母親に呼びかけるとき何と書いていましたか。次の言い方のうち、自分で言ったことがあるものをすべて選んでください。「今」ではなく「小学生くらいのとき」ですので、思い出しながら答えてください。(M. A.)

- | | |
|------------|-----------------------------|
| (ア) かーちゃん | (カ) おっかさん |
| (イ) おかーちゃん | (キ) おふくろ |
| (ウ) かーさん | (ク) おかん |
| (エ) おかーさん | (ケ) その他→具体的に () |
| (オ) ママ | どれも言わない |

(8) では、今は母親に何と呼びかけていますか。次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。お母様がお亡くなりになった方は、夢で呼びかけるときなどで考えてください。あなたの年齢は、今の年齢です。(M. A.)

* 選択肢は (7) と同様であるが、「ばーちゃん／おばーちゃん など」を「その他」の直前に追加した。

3.2. 全体としての各種表現の使用者率

全体としての各種表現の使用者率について、【今】と【小学生の頃】を合わせて示すと図2のとおりである。

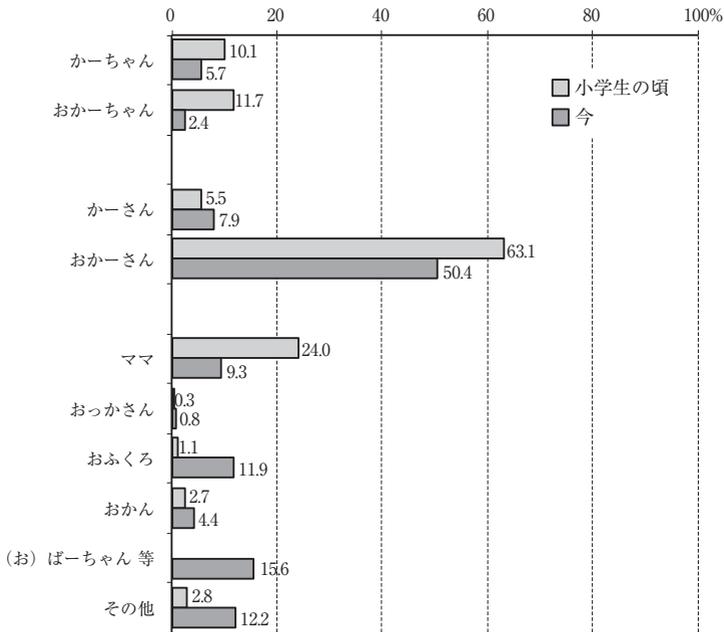


図2 「母親」の各種表現の使用者率

まず【今】の傾向を見てみよう。

現在東京都において使用者率が最も高いのは「おかーさん」であり、半数にあたる50.4%が用いていることが確認できる。この数値は2013年に岡山市で調査した53.1%とほぼ同じであることから（使用者率が最も高いのも東京都と同様に「おかーさん」である）、全国的な傾向でもある可能性が考えられる。

これに次ぐのは「(お)ばーちゃん等」と「おふくろ」であり1割強が用いている。

使用者率は1割に満たないが、「ママ」「かーさん」「かーちゃん」がこれに続く。このうち「かーさん」は、今から100年近く前に作られた童謡『あめふり』で「あめあめふれふれかあさんが じゃのめでおむかえうれしいな」と「かあさん」が用いられていたり、東京都出身の窪田聡氏（現在は岡山県在住）が1956年に作詞・作曲した『かあさんのうた』は曲名からして「かあさん」であることからすると、かつては東京都において年齢層を問わず用いていた非常に一般的な表現であったと考えられるが、現在ではかなり衰退している。

岡山市では「おかーさん」に次ぎ13.6%が用いている「おかーちゃん」は、東京都ではわずか2.4%にとどまり一般的な呼称ではない。『日本のことばシリーズ13 東

京都のことば』の「Ⅳ 俚言」で、明治38年京橋生まれの男性の発話として「それがふつうの言葉ですよ」と説明されている「おっかさん」は、現在ではほぼ死語となっている。関西起源と考えられる「おかん」が4.4%と少数ながら見られる。詳しく分析すると使用者のうち4割近くは東京都出身者である。関西方言の東京都での普及という点で今後の動向が注目される。筆者が中心となって実施した2009年の全国調査でも、「首都圏」での「おかん」の使用率は1割近くあった（尾崎喜光2018）。なお「その他」には、「(お)ばーちゃん等」に含めることを期待した最近普及しつつある「ばーば」（尾崎喜光2018）や、名前（+さん）等が一定数回答されている。

次に【小学生の頃】を見ると、大きな傾向は【今】と同様であることがまず確認される。使用者率は「おかーさん」が最も高く63.1%であり、これに「ママ」が24.0%で続く。

【小学生の頃】と【今】との異なりという観点から図2を見ると、「ママ」「かーちゃん」「おかーちゃん」は、【小学生の頃】から【今】にかけて数値が大きく低下することが確認される（「おかーさん」にもその傾向がいくぶん認められる）。すなわちこれらは子供の頃には使うがその後は使うのをやめる「子供語」の性質を帯びた表現であると言える。「おかーちゃん」については岡山市でもそのことが確認されている。「その他」には「お(っ)かー」「おかーちゃま」等が一定数回答されている。

一方、「おふくろ」「(お)ばーちゃん等」にはこれと逆の傾向が認められる。【小学生の頃】にこれらを用いる人はほとんどいない一方、【今】では一定数いることから、これらは「成人語」であると言える。ただし「(お)ばーちゃん等」の使用には、母親に孫ができるという状況自体の変化も関係していることを考えると、「成人語」の典型は「おふくろ」である。これらと比較すると使用者率は【今】も【小学生の頃】も小さいが、「かーさん」「おかん」にも「成人語」の傾向がいくぶん認められる。

こうした【小学生の頃】と【今】との異なりについて、いずれか（あるいは両方）の使用者率が高い表現について、回答者の属性別（男女別・年齢層別）に見てみよう。

3.3. 属性別に見た主要な表現の使用率

(1) 「かーちゃん」

「かーちゃん」について、【今】と【小学生の頃】を比較する形で属性別に示すと図3のとおりである。図の最も左側には「全体」の数値を改めて示した。

「かーちゃん」は「全体」として【小学生の頃】から【今】にかけ数値を低下させる「子供語」の性質を含む表現である。

男女別に見ると男女で差が大きく、【小学生の頃】も【今】も「かーちゃん」は主として男性が用いる表現となっている。

年齢層別に見ると、【今】は年齢差がそれほど大きくないのに対し、【小学生の頃】は年齢差が大きく、60代を中心とする上の年齢層で、子供時代に一定程度の割合の人が使っていた表現であることがわかる（60代では約2割）。このことは、子供が使う表現として「かーちゃん」が現在衰退しつつあることを示している。この点については、回答者を東京都出身者に限定して生年別に見ることにより、東京都の子供時代の変化を改めて確認する。

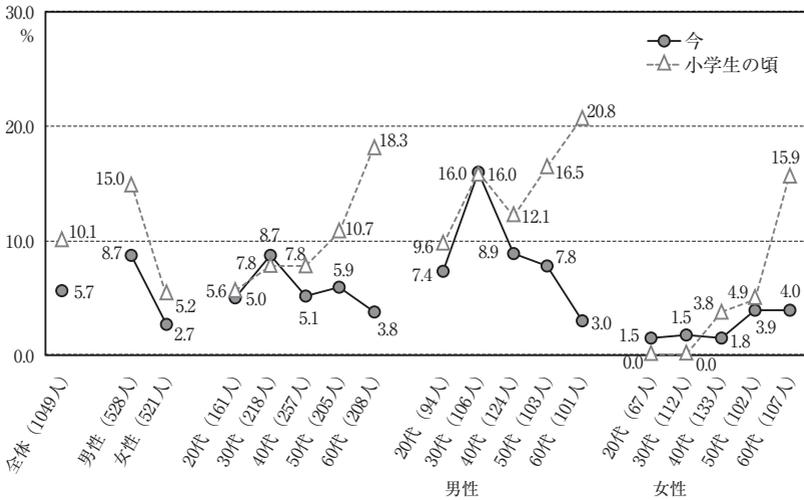


図3 「かーちゃん」の使用者率

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、男女で傾向が大きく異なることが確認される。全体的に小さな数値の範囲内ではあるが、女性は【今】も【小学生の頃】も年齢層に関わらず「かーちゃん」の使用者率が低いのに対し(ただし60代の【小学生の頃】はある程度数値が高い)、男性は年齢層が低くなるに従い【小学生の頃】の数値が低下し、逆に【今】の数値は増加する傾向が認められる。女性よりも「かーちゃん」を用いる男性においては、「子供語」として衰退しつつあるとともに、子供のうちは使うけれども大人になるに従い使わなくなるという形での加齢変化も同時に見られることがここに現れているものと考えられる。年齢が高くなるに従い「かーちゃん」を用いなくなる人が生じる背景には、この表現に子供っぽさが伴うことに加え、後に見るように、男性の中には「おふくろ」を用いる人が生じること、さらに母親の状況自体の変化に伴い「(お)ばーちゃん等」を用いる人が生じること(これは女性にも言える)も関係していると考えられる。

(2) 「おかーちゃん」

「おかーちゃん」について同様に示すと図4のとおりである。

「おかーちゃん」も「全体」として【小学生の頃】から【今】にかけ数値を低下させる「子供語」の性質を含む表現である。

男女別に見ると、男女で顕著な差は見られない。ただし男女とも、【小学生の頃】から【今】にかけ数値を低下させる。

年齢層別に見ると、【今】はどの年齢層でも使用者率が著しく低く、「おかーちゃん」は基本的に成人は使わない表現となっている(ただし50・60代では使用者が多少認められる)。これに対し【小学生の頃】は年齢差が大きく、60代を中心とする上の年

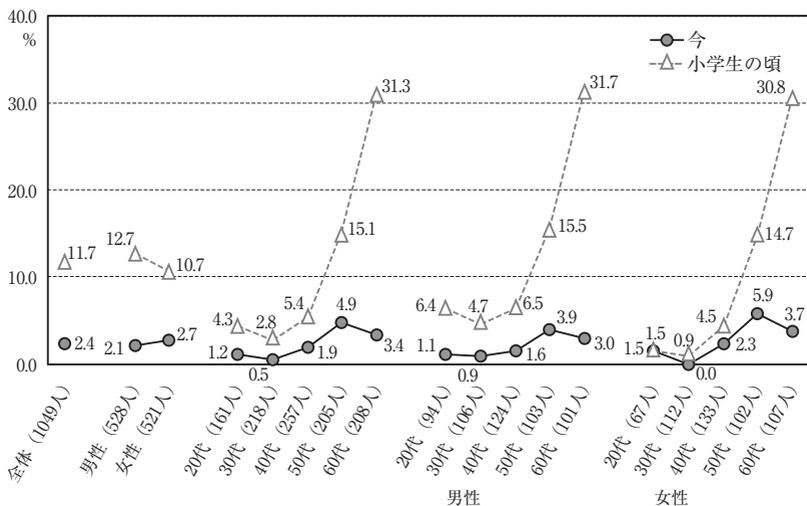


図4 「おかーちゃん」の使用者率

年齢層が子供時代に一定程度の人が使っていた表現であることがわかる（60代では約3割）。このことは、先に見た「かーちゃん」と同様、「おかーちゃん」も子供が使う表現として現在衰退しつつあることを示している。

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、男女で傾向が共通する。【今】は男女ともにどの年齢層でも使用者率が著しく低い（ただし50・60代では使用者が多少認められる）。一方【小学生の頃】は、男女とも60代で約3割が使用している。これが50代では半減し、さらに40代以下では極めて少なくなる。子供が使う表現としての「おかーちゃん」の衰退は男女共通に見られる。

(3) 「かーさん」

「かーさん」について同様に示すと図5のとおりである。

「かーさん」は「全体」として【小学生の頃】も【今】も使用者率が低く、「子供語」としても「成人語」としても近年ではそれほど有力な表現とはなっていない。ただし、わずかではあるが、【小学生の頃】から【今】にかけて数値が上昇しており、この点が先に見た「かーちゃん」「おかーちゃん」と異なる。語形の点から考えると、接尾辞「さん」の「さ」が幼児語的発音である「ちゃ」となった「ちゃん」を含むのが「子供語」、そのような発音上の特徴を伴わない「さん」を含むのが「かーさん」である。

男女別に見ると、男女で差が大きく、【小学生の頃】も【今】も「かーさん」を用いるとすれば主として男性である。これは先に見た「かーちゃん」と同様の傾向である。男性（や男児）は女性（や女児）よりも、丁寧さや言葉の上品さを表わす接頭辞「お」を含めない「かーちゃん」「かーさん」を用いる傾向が見られる。

年齢層別に見ると、【小学生の頃】も【今】も年齢層による顕著な違いはない。【小

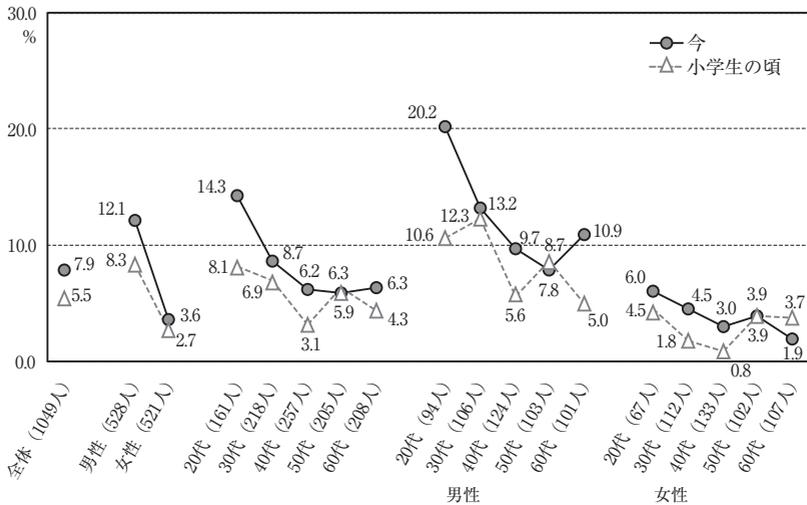


図5 「かーさん」の使用率

学生の頃」と【今】との間にも顕著な違いはないが、小さな数値の範囲内ながら、一般的に【小学生の頃】よりも【今】の方が数値が高くなる。特に20代では、【小学生の頃】から【今】にかけて数値がやや大きく上昇しており、「成人語」としての特徴が見られる。30代以上で【今】の数値が低くなるのは、後に見るように、世代シフトに伴い「(お)ばーちゃん」等を用いるケースが30代以上で増加することや、40代以上の男性ではさらに「おふくろ」の使用率が増加することに起因するものと考えられる。

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、女性は【小学生の頃】も【今】も「かーさん」の使用率はその年齢層でも低く有力な表現となっていないのに対し、男性は【今】も【小学生の頃】もある程度使用率が見られる。特に20代の男性の【今】の使用率は20.2%と高い。若年層に向けて数値が高くなる傾向も見られ、「かーさん」は20代の男性をピークとする若年層の男性が主として用いる表現となっている。30代以降に向けて数値が減少するのは、「(お)ばーちゃん」等や「おふくろ」の使用率が30代以降で増加することに起因するものと考えられる。

(4) 「おかーさん」

「おかーさん」について同様に示すと図6のとおりである。

「おかーさん」は「全体」として【小学生の頃】も【今】も使用率が高いことが改めて確認される。ただし【小学生の頃】から【今】にかけて使用率が1割以上減少していることから、「かーちゃん」「おかーちゃん」と同様、「子供語」としての性質もいくぶん帯びている。積極的にそうした特徴を持っているというよりも、成人になると「おふくろ」や「(お)ばーちゃん」等に置き換える人が出てくるため、結果

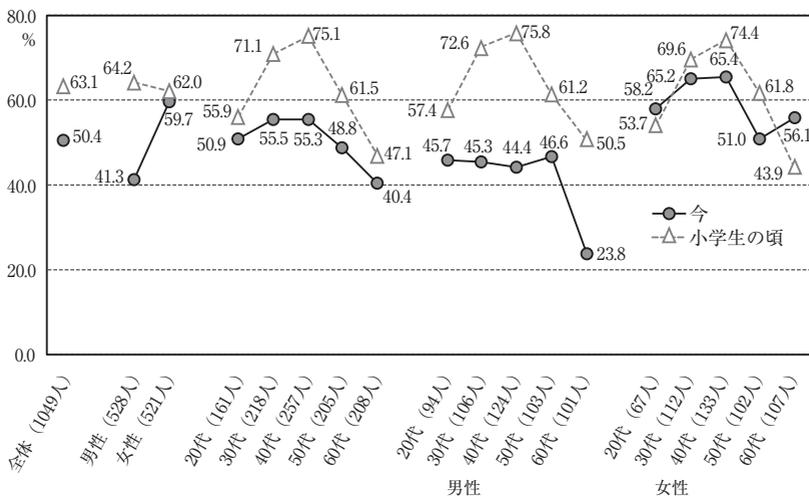


図6 「おかしさん」の使用者率

的に「子供語」としての性質を帯びることとなったものと考えられる。

男女別に見ると、【小学生の頃】は男女差がほとんどなく男女共通に用いる表現となっている。これに対し【今】では、男性の数値が2割以上低下する一方、女性にはそうした変化はほとんど見られず、【小学生の頃】の使用者率が維持される。その結果、「おかしさん」は【今】では相対的に女性が用いる表現となっている。男性の数値の低下には、特に「おふくろ」への置き換えが関わっているものと考えられる。

年齢層別に見ると、【今】は30代・40代がピークとなっているが、この傾向は【小学生の頃】においてさらに顕著に見られる。後に見るように、子供が使う表現として「おかしさん」が一時期普及したが、その後は「ママ」が普及し始めたことが、【小学生の頃】の山型のグラフとして表れており、その傾向が【今】にも引き継がれているものと考えられる。これに加え【今】には、特に40代以降での「おふくろ」や「(お)ばーちゃん」等への置き換えも、山型のグラフとなる要因と考えられる。

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、女性は【小学生の頃】も【今】も「おかしさん」の使用者率が高く、子供の頃のみならず成人になってからも使い続ける傾向のある、30代・40代を使用のピークとする表現であることがわかる。60代の女性では【今】になると数値がむしろ高くなるが、【小学生の頃】に「おかしちゃん」「かーちゃん」の使用者率が高い年代であったことを考えると、これらの表現から置き換えた人が一定の割合いたことによる可能性が考えられる。これに対し男性は、【小学生の頃】は女性とほぼ同様に30代・40代をピークとし、使用者率も女性と大差がないが、【今】になると使用者率が40～50%にまで大きく減少する点、とりわけ【小学生の頃】の数値も低い60代では20%台にとどまる点は女性と大きく異なる。「おかしさん」から他の表現への置き換えは主として男性に見られることが、男女によるグラフの違い

として現われているものと考えられる。

(5) 「ママ」

「ママ」について同様に示すと図7のとおりである。

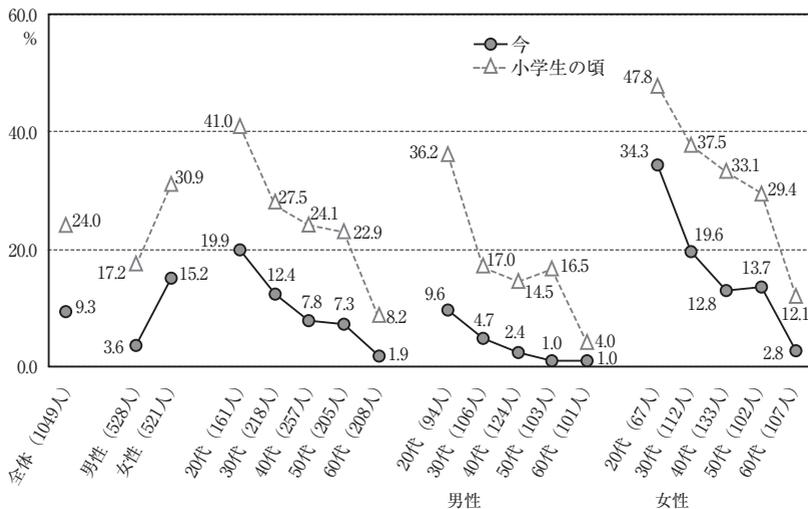


図7 「ママ」の使用者率

外来語の「ママ」は、「全体」の【今】の使用者率は1割程度とそれほど高くないが、【小学生の頃】は4人に1人にあたる24.0%が使用する有力な表現となっている。子供のうちは使うがその後は使うことをやめる人が少なからず現れる「子供語」の性質を持つ表現である。

男女別に見ると、【小学生の頃】も【今】も「ママ」は主として女性が用いる表現となっている。先に見た「かーちゃん」「かーさん」と逆の傾向を示す。ただし【小学生の頃】から【今】になると男女とも使用者率は大きく減少する。特に男性で【今】「ママ」を使っている人は極めて少ない。

年齢層別に見ると、【今】も【小学生の頃】も数値は若年層になるに従い一貫して上昇する。【今】よりも【小学生の頃】の方が数値が高いことから、子供が使う表現として「ママ」が現在普及しつつあり、その傾向が【今】にも引き継がれているものと考えられる。

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、【小学生の頃】も【今】も、男女ともに若年層に向けての数値の増加傾向が見られる。男女で比較すると、どの年齢層においても、また【小学生の頃】も【今】も、「ママ」は男性よりも女性で使用者率が高い。特に20代の女性は、【小学生の頃】で約半数が、【今】でも3人に1人が用いる有力な表現となっている。

(6) 「おふくろ」

「おふくろ」について同様に示すと図8のとおりである。

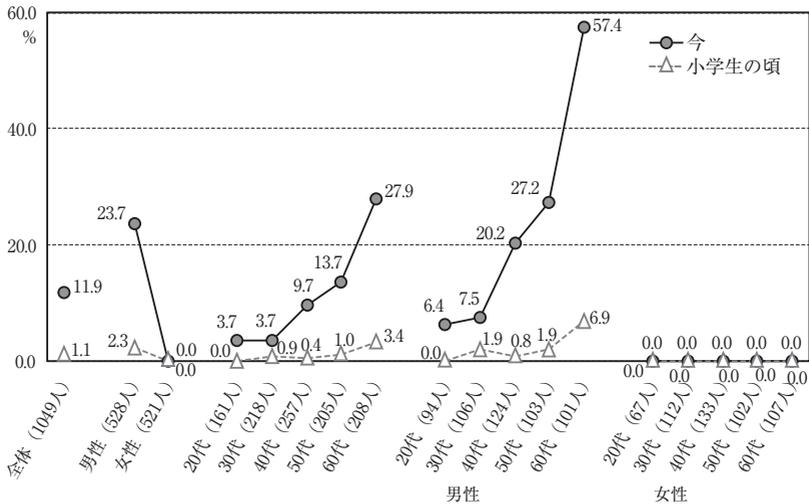


図8 「おふくろ」の使用率

「全体」の【今】の使用率は1割程度にとどまりそれほど高くないが、【小学生の頃】はほとんどいない点が注目される。すなわち「おふくろ」は、子供のうちは使わないが、その後成人になると使い始める人が一定程度現れる表現となっている。「成人語」の典型と言える。

男女別に見ると、女性は【小学生の頃】も【今】も「おふくろ」を使う人はほとんどいない。男性も、【小学生の頃】は女性と同様に使う人はほとんどいないが、【今】だとおよそ4人に1人にあたる23.7%が使用する有力な表現となっている。すなわち「おふくろ」は、男性が成人になってから使う人が現れる、男性の「成人語」であることが確認される。

年齢層別に見ると、【小学生の頃】はどの年齢層でも使用者率がほとんど見られない。すなわち、いつの時代においても「おふくろ」は子供が使う表現ではない。これに対し【今】は、年齢層が高くなるに従い一貫して使用者率が高くなる。これについては、年齢層が高くなるに従い使用者率も一層高くなる「成人語」と見る可能性もあるが、現在衰退しつつある「成人語」と見る可能性もある。あるいはこれらが同時に働いている可能性も考えられる。【小学生の頃】から【今】にかけて加齢変化が見られることは確かであるが、それは「衰退」という時代変化が存在することを否定するものではない。時代変化も生じているか否かについては、今後の経年調査により把握する必要がある。

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、男性も女性も【小学生の頃】はどの年齢

層でも使用者率がほとんど見られない（ただし60代の男性では多少数値が高い）。特に女性における使用者率は、【小学生の頃】も【今】も皆無である。これに対し男性の【今】は、どの年齢層にも使用者率が見られる。また、【小学生の頃】から【今】にかけての増加はどの年齢層においても見られる。ただし【今】の数値および【小学生の頃】からの増加幅は年齢層により大きく異なる。20代・30代の男性の【今】の使用者率は1割にも達しないのに対し、40代で2割、50代で約3割と数値が増加し、60代では約6割と過半数の男性が用いる有力な表現となっている。これについては、先に述べたように、年齢層が高くなるとともに使用者率も一層高くなる「成人語」としての可能性の他、「衰退」という時代変化が進行中である可能性、あるいはそれら両方が同時に働いている可能性が考えられる。

(7) 「おかん」

2009年に全国の約800人を調査した項目のうち、親族呼称の結果を分析した尾崎喜光（2018）は、もともと近畿地方を中心とする西日本で使われていたと考えられる「おかん」は首都圏でも約1割の使用者率が見られること、また首都圏の20代～30代では加齢変化も同時に働いている可能性が考えられることを報告している。この調査データの公開について紹介した鎌水兼貴（2021）も、「おかん」が近畿地方周辺地域へと拡張していることを記事の一部として報告している。

この「おかん」について同様に示すと図9のとおりである。

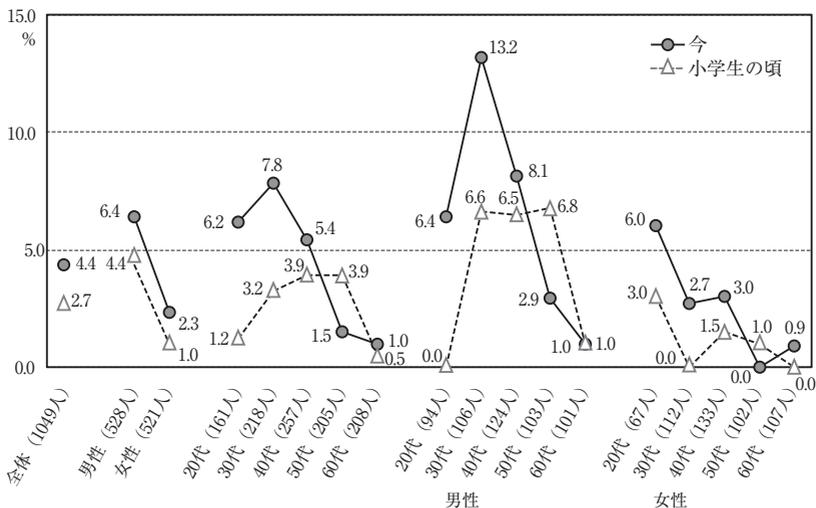


図9 「おかん」の使用者率

「全体」の【今】の数値は5%程度とあまり高くはないことが確認される。【小学生の頃】の数値はさらに低く、東京都の子供の表現としてはほとんど用いられていない。

男女別に見ると、数値が低い範囲内においてではあるが、【小学生の頃】も【今】も男性の方が数値が高い。使うとすればほぼ男性である。

年齢層別に見ると、やはり数値が低い範囲内においてではあるが、【今】の数値は若年層に向けて増加する傾向が見られる点が注目される。特に30代では1割弱が使用している。「おかん」が東京都において普及しつつある可能性が考えられる。その若年層も【小学生の頃】の使用者率は低いことから、特に20代・30代では加齢変化も同時に働いていることが考えられる。先に述べた全国調査での首都圏の状況と同様の傾向が、今回の東京都での調査でも確認された。

回答者を男女に分けて年齢層別に見ると、若年層に向けての数値の増加は男性において明確に認められる。特に20代・30代では【小学生の頃】から【今】への数値の増加幅も比較的大きい。加齢変化は主としてこの年齢層の男性において見られる。

(8) 「(お) ばーちゃん」等

「(お) ばーちゃん」等について同様に示すと図10のとおりである。なおこの表現は世代交代に伴い使用されうるものであることから、【小学生の頃】については選択肢とせず、【今】についてのみ選択肢とした。

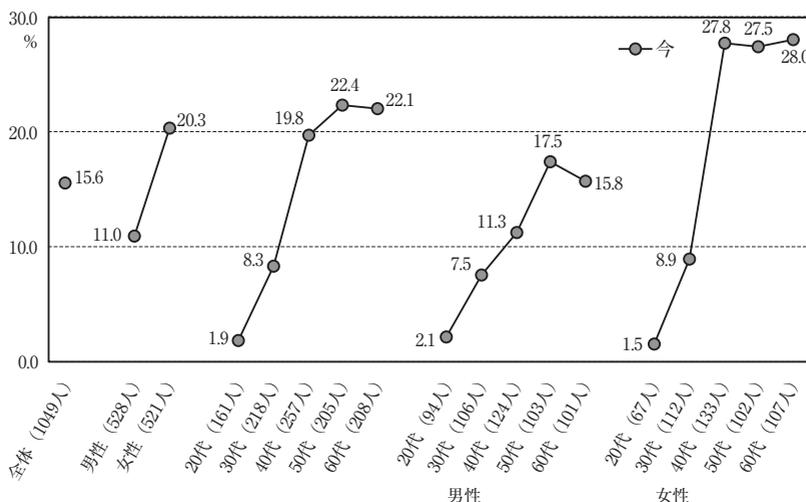


図10 「(お) ばーちゃん」等の使用者率

「全体」の使用者率は15.6%にとどまりそれほど高くない。表現の選択以前のこととして、非婚化やいわゆるDINKSの増加といったライフスタイルの変化およびそれに伴う家族構成の時代変化が、この数値の背景にあるものと考えられる。

男女別に見ると、「(お) ばーちゃん」等の使用者率は男性よりも女性で高い。自分の母親に孫ができるという状況自体は男女で大差がないと考えられるとすれば、自分

ではなく自分の子の視点から母親を呼称することは、男性よりも女性が好む傾向にあると言える。

年齢層別に見ると、「(お) ばーちゃん」等の使用者率は高年齢層に向けて高くなる。20代・30代では数値がまだ低いが、40代以上で約2割となる。自分の母親に孫ができるという状況は主として20代から40代で生じることと深く関係しているものと考えられる。

こうした状況は、回答者を男女に分けて年齢層別に見た際にも認められる。特に女性においては、30代から40代にかけての増加幅が約2割と大きく、40代以降の使用者率も約3割にまで達し、40代以上の女性における主要な表現の一つとなっている。

(9) 子供による母親の呼称の時代変化

最後に、母親の呼称の時代変化を見てみよう。

本調査では、【今】用いている呼称に加え、【小学生の頃】に用いていた呼称についても問うた。

【小学生の頃】というのはおおむね10歳前後である。ということは、たとえば1950年代生まれの回答者の回答は、1960年代に10歳前後であった子供たちが用いていた母親の呼称ということになる。同様に、1960年代生まれの回答者の回答は、1970年代の子供たちが用いていた母親の呼称ということになる。

このように考えると、東京都の子供たちが用いていた母親の呼称の時代変化をこのデータから読み取ることができる。

ただし回答者のうち約半数は東京都以外の出身であることから、東京都での変化を純粋にとらえるためには、東京都出身の回答者を抽出する必要がある。

そこで、回答者1,049人のうち東京都出身者530人(50.5%)を抽出し、これについて回答者の生年を10年刻みの西暦により示すことで時代変化をとらえようとしたのが図11である。繰り返すが、たとえば1950年代生(まれ)の回答は、おおむね1960年代の子供が用いていた母親の呼称ということになる。これにより把握できる時代幅は1960年代から2000年代の半世紀である。

なお、回答者にはじつは1940年代生(まれ)も含まれているが、該当者は13人にとどまり、数値の信頼性が十分確保できないことから分析対象から除外した。また、1990年代生(まれ)の最も若い者は、調査時の最低年齢を20歳としたことから、1998年生まれである。すなわち1999年生まれは19歳であったためもともデータに含まれておらず、ここだけ年齢幅が10年ではなく9年となっている。1990年代生(まれ)に向けて一貫した時代変化が見られる場合、ここだけ本来の数値が若干抑えられて現われている可能性がある。

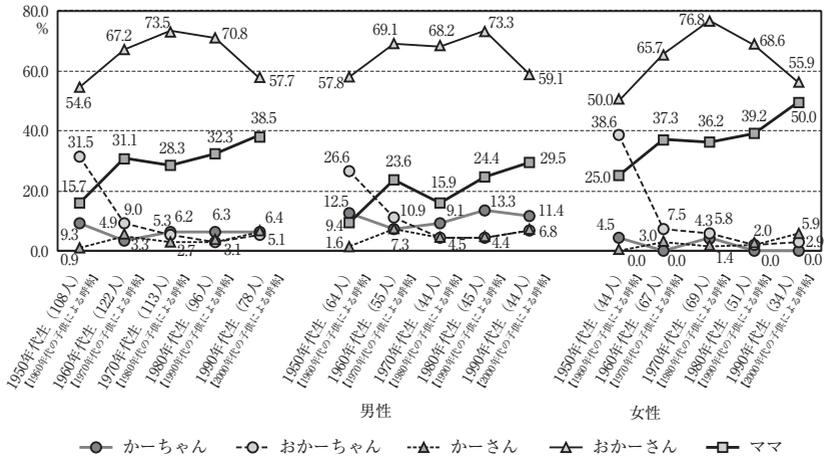


図 11 東京都の子供による母親の呼称の時代変化

これによると、1960年代からの半世紀の間に東京都の子供たちが用いてきた母親の呼称にドラスチックな変化は認められない。最も一般的な呼称は「おかーさん」であり、次いで「ママ」である。これらが比較的安定的に用い続けられている。対人的価値観が大きく変わるような社会変化がこの間に特になかったことが、こうした言葉の安定性に寄与しているものと考えられる。

ただし、ゆるやかにではあるが変化も見られる。1960年代は「おかーちゃん」を用いる子供も約3割おり、「おかーさん」に次ぐ呼称となっている。これが1970年代になると1割程度にまで急減し、その後さらに衰退が進む。数値は小さいながら同様の傾向は「かーちゃん」にも見られる。該当者数が少ないことから分析対所から除外した1940年代生(まれ)では「かーちゃん」が半数近くいることから推測すると、東京都ではまず「かーちゃん」が戦後に衰退し、それを追うかのように「おかーちゃん」も衰退するという時代変化があったことが推測される。1918年に東京都神田で生まれた評論家・宗武朝子氏は短文の中で、近くの商家の子は「かーちゃん」を、自分は幼児の頃「おかーちゃん」を使っていたと述べている(宗武朝子1978)。1920年代の東京都では「かーちゃん」「おかーちゃん」を用いる子供が多かったことが垣間見られる。その後衰退した結果がこの状況であると考えられる。東京都では子供の表現として早くに衰退した「おかーちゃん」は、岡山市では「おかーさん」に次ぐ子供の表現としてある程度普通に用いられており、衰退は東京都ほど早くない(尾崎喜光2018)。

「おかーちゃん」が1970年代に急減するのに代わって使用者率を伸ばしてきたのは「おかーさん」と「ママ」である。NHK教育テレビ(現・Eテレ)の幼児向け番組「おかあさんといっしょ」の放送開始は1959年である。東京都では子供による最も一般的な呼称としてこの頃「おかーさん」が定着しつつあったことが、番組名に「おかあ

さん」を含めた背景にあったのかもしれない。

近世・近代における父親・母親の呼称の変化について論じた清水康行（1987）は、1904年に始まる小学校国語教科書（国定読本）の第一期『尋常小学読本』においてオトウサン・オカアサンが一貫して用いられ、第二期以降もほぼ統一的に用いられてはいるものの、これによりオトウサン・オカアサンは国定読本の新造語とまで断ずることはできないとする。その理由として、明治中期（1890年頃から）の小説類などには、良家の子女の台詞としてオトウサン・オカアサンが目だって出てきていることを指摘し、このことから、すでにこの頃には良家の子女の間でオトウサン・オカアサンが割に使われていたのではないかと推測する。そうした社会階層でまず使われ始めた「おかーさん」が、国定読本により標準的な呼称として広く知られ、日常的には「かーちゃん」「おかーちゃん」等を用いていた東京都においても、やがて子供がふつうに用いる呼称として普及し始め、そのピークとなったのが1980年代であると考えられる。一部の社会階層から始まり一般的な使用のピークを迎えるまで約1世紀となる。

「おかーさん」は1980年代にピークを迎え、その後はゆるやかに衰退に向かう。これは「ママ」の使用率が徐々に増加してきたことによる。特に1970年代になると、「おかーちゃん」に代わって第2の主要な表現となり、使用率は3割に達する。民放の幼児向け番組「ママとあそぼう！ピンポンパン」の放送開始が1966年であるが、時代を少し先取りして番組名に「ママ」を含めたのかもしれない。先述した宗武朝子氏は、幼児が使う「ママ」について、「ママの氾濫に反発しながら」と言及している（宗武朝子1978）。1970年代の東京都では、高年層の大人には「氾濫」と感じられるほど、子供たちの間で「ママ」の使用が急速に高まったことがここからも伺える。

「かーさん」はどの年代においても使用者率が低い。該当者数が少ないことから分析対所から除外した1940年代生（まれ）においても「かーさん」は全く用いられていない。近年ではいくぶん大人びたニュアンスを伴うため、子供が用いる表現とはなっていないのかもしれない。

以上に分析した1960年代以降の半世紀にわたる東京都の子供たちによる母親の呼称を整理すると、ドラスチックな変化はなかったものの、「かーちゃん」→「おかーちゃん」→「おかーさん」→「ママ」という変化（置き換え）がゆるやかに進行してきたと考えられる。最後の「ママ」は、2000年代の子供の間ではいまだ「おかーさん」ほど優勢ではないが、今後20年ほどの間に逆転することも考えられる。20年後とは、現時点からの10年間ほどである。東京都の今の子供たちが「おかーさん」以上に「ママ」を使っているかが注目される。

男女別に見てみよう。

最も有力な「おかーさん」は、男性においても女性においても最も有力な表現であり、使用者率にも大きな違いはない。1960年代以降ゆるやかな増加傾向が見られ、その後は衰退傾向が見られる点も同様である。

これに対し「ママ」は、男女とも1960年代以降ほぼ一貫してゆるやかな増加傾向が見られる点は共通であるが、使用者率には大きな違いが見られ、「ママ」は主として女性（女兒）が用いる表現となっている。特に2000年代になると女性（女兒）の

使用者率は5割に達し、1970年代以降衰退傾向にある「おかーさん」とほぼ同じになる。

1960年代から1970年代にかけての「おかーちゃん」の衰退は、女性において非常に明確に認められる。およそ4割あった使用者率は1割以下にまで激減する。男女に分けて分析したとき、この半世紀の間に最も変化が大きかった部分と言える。

4. まとめと今後の課題

本研究で得られたおもな知見をまとめると次のようになる。

① 全般的な傾向

東京都の【今】において使用者率が最も高いのは「おかーさん」であり半数が用いている。これに次ぐのが「(お)ばーちゃん等」「おふくろ」であり1割強が用いている。使用者率は1割に満たないが「ママ」「かーさん」「かーちゃん」がこれに続く。このほか「ばーば」や名前(＋さん)等が「その他」として一定数回答されている。

【小学生の頃】の大きな傾向は【今】と同様であるが、両者を比較して異なる点として、「ママ」「かーちゃん」「おかーちゃん」が【小学生の頃】から【今】にかけて数値が大きく低下することが指摘される。これらは「子供語」の性質を帯びた表現と言える。一方「おふくろ」「(お)ばーちゃん等」にはこれと逆の傾向が認められる。これらは「成人語」と言える。

② 「かーちゃん」

男女別に見ると、【小学生の頃】も【今】も「かーちゃん」は主として男性が用いる表現となっている。

年齢層別に見ると、【小学生の頃】において年齢差が大きく、「かーちゃん」は60代を中心とする上の年齢層において、子供時代に一定程度の割合の人が使っていた表現となっている。これは、子供が使う表現として「かーちゃん」が現在衰退しつつあることを示している。

男女に分けて年齢層別に見ると、女性は【今】も【小学生の頃】も年齢層に関わらず「かーちゃん」の使用率が低い。これに対し男性は、年齢層が低くなるに従い【小学生の頃】の数値は低下し、逆に【今】の数値は増加する。男性においては、「子供語」として衰退しつつあるとともに、子供のうちは使うが大人になると使わなくなるという形での加齢変化も同時に見られることの現われと考えられる。男性は成人してから「おふくろ」を使い始める人が現れることが、この加齢変化に関係していよう。

③ 「おかーちゃん」

「かーちゃん」と異なり男女で顕著な差は見られない。使用者率はともに【小学生の頃】から【今】にかけて低下する。

年齢層別に見ると、【今】はどの年齢層でも使用者率が著しく低く、「おかーちゃん」は基本的に成人は使わない。【小学生の頃】は年齢差が大きく、60代を中心とする上

の年齢層において子供時代に一定程度の人が使っていた表現となっている。「かーちゃん」と同様、「おかーちゃん」も子供が使う表現として現在衰退しつつあることを示している。

男女に分けて年齢層別に見ると、傾向は男女で共通する。【今】は男女ともどの年齢層でも使用者率が著しく低い。一方【小学生の頃】は、男女とも60代では約3割が使用しているが、50代以下に向け数値が低下する。子供が使う表現として「おかーちゃん」は男女ともに衰退しつつある。

④「かーさん」

【小学生の頃】も【今】も「かーさん」の使用者率は低く、近年では有力な表現となっていない。

男女差が大きく、【小学生の頃】も【今】も、使うとすれば主として男性である。

年齢層別に見ると、【小学生の頃】も【今】も年齢層による顕著な違いはないが、【小学生の頃】よりも【今】の方が数値が高くなり「成人語」としての特徴が見られる。

男女に分けて年齢層別に見ると、「かーさん」は20代の男性をピークとする若年層の男性が主として用いる表現となっている。

⑤「おかーさん」

男女別に見ると、【小学生の頃】は男女共通に用いる表現となっている。これに対し【今】は、男性は【小学生の頃】から数値が低下する一方女性にはそうした変化がほとんど見られない結果、【今】では「おかーさん」は相対的に女性が用いる表現となっている。

年齢層別に見ると、【今】も【小学生の頃】も使用者率は30代・40代がピークとなっている。この表現が一時期普及したこと、しかしその後は「ママ」に取って代わられつつあることによるものと考えられる。

男女に分けて年齢層別に見ると、女性は【小学生の頃】も【今】も「おかーさん」の使用者率はどの年齢層も高く、成人以降も使い続ける傾向がある。これに対し男性は、【小学生の頃】は女性と大差がないが、【今】になると使用者率がどの年齢層でも大きく減少する。「おかーさん」から他の表現への置き換えは主として男性に見られる。

⑥「ママ」

男女別に見ると、【小学生の頃】も【今】も「ママ」は主として女性が用いる表現となっている。ただし【小学生の頃】から【今】になると、使用者率は男女とも大きく減少する。「子供語」の性質を持つ表現と言える。特に男性で【今】「ママ」を使っている人は極めて少ない。

年齢層別に見ると、【今】も【小学生の頃】も数値は若年層になるに従い一貫して上昇する。子供が使う表現として「ママ」が現在普及しつつあり、その傾向が【今】にも現われているものと考えられる。

男女に分けて年齢層別に見ると、【小学生の頃】も【今】も、先述した若年層に向

けての数値の増加傾向は男女ともに見られる。特に20代の女性は、【小学生の頃】で約半数が、【今】でも3人に1人が用いている。

⑦「おふくろ」

【小学生の頃】に「おふくろ」を使っていた人はほとんどおらず、その後大人になってから使い始める人が一定程度現れる典型的な「成人語」である。

男女別に見ると、女性は【小学生の頃】も【今】も「おふくろ」を使う人はほとんどいない。男性も【小学生の頃】はほとんどいないが、【今】ではおよそ4人に1人が使っている。「おふくろ」は男性の「成人語」である。

年齢層別に見ると、【小学生の頃】はどの年齢層でも使用者率がほとんど見られず、「おふくろ」はいつの時代においても子供が使う表現ではない。これに対し【今】は、年齢層が高くなるに従い使用者率が上昇する。年齢層が高くなるに従い使用者率が一層高くなる「成人語」である可能性、現在衰退しつつある「成人語」である可能性、その両方である可能性が考えられる。

男女に分けて年齢層別に見ると、【小学生の頃】は男女ともどの年齢層でも使用者はほとんど見られない。女性は【今】も皆無である。これに対し男性の【今】は、どの年齢層にも使用者率が見られる。【今】の数値および【小学生の頃】からの増加幅は高年齢になるほど高い。その原因としては上記3つの可能性が考えられる。

⑧「おかん」

近畿地方を中心とする西日本の表現と考えられる「おかん」の【今】の東京都での使用者率はそれほど高くない。【小学生の頃】の数値はさらに低く、東京都の子供の表現としてはほとんど用いられていない。

男女別に見ると、【小学生の頃】も【今】も、使うとすればほぼ男性である。

年齢層別に見ると、【今】の数値は若年層に向け増加傾向が見られ、「おかん」が東京都において普及しつつある可能性が考えられる。【小学生の頃】は若年層も使用者率が低いことから、加齢変化も同時に働いていることが考えられる。

男女に分けて年齢層別に見ると、若年層に向けての数値の増加は男性において明確に認められる。特に20代・30代では【小学生の頃】から【今】への数値の増加幅も比較的大きく、加齢変化は主としてこの年齢層の男性において見られる。

⑨「(お)ばーちゃん」等

「(お)ばーちゃん」等の使用者率はそれほど高くない。日本人のライフスタイルの変化およびそれに伴う家族構成の変化がその背景にあるものと考えられる。

男女別に見ると、この表現の使用者率は男性よりも女性で高い。

年齢層別に見ると、使用者率は高年齢層に向けて高くなる。

こうした年齢差は男女に分けた場合にも認められる。特に40代以上の女性では主要な表現の一つとなっている。

⑩子供による母親の呼称の時代変化

回答者のうち東京都出身者のみを抽出し、1960年代から2000年代までの半世紀にわたる東京都の子供たちによる母親の呼称の時代変化を見たが、この間にドラスチックな変化は認められなかった。最も一般的な呼称は「おかーさん」、次いで「ママ」であり、これらが比較的安定的に用い続けられている。

ただし、ゆるやかにではあるが変化も見られる。「おかーちゃん」の使用率は1970年代になると急減し（特に女性において）、その後はさらに衰退が進む。同様の傾向は「かーちゃん」にも見られる。それに代わり使用者率を伸ばしてきたのは「おかーさん」と「ママ」である。このうち「おかーさん」は1980年代にピークを迎え、その後はゆるやかに衰退傾向を示す。これは「ママ」の使用率が徐々に増加してきたことによる。すなわち東京都では、1960年代以降、「かーちゃん」→「おかーちゃん」→「おかーさん」→「ママ」という変化（置き換え）がゆるやかに進行してきたと考えられる。

男女別に見ると、「ママ」は1960年代以降で男女ともほぼ一貫してゆるやかな増加傾向が見られるが、使用者率には男女で大きな違いが見られ、「ママ」は主として女性（女兒）が用いる表現となっている。特に2000年代では女性（女兒）の使用率は5割に達する。

以上の結果が得られた。

本研究では東京都における母親の呼称について、現時点での状況を明らかにするとともに、【小学生の頃】を想起してもらうことにより1960年代から2000年代までの半世紀にわたる子供たちによる母親の呼称の時代変化を明らかにした。さらに、【小学生の頃】と【今】とを比較することで加齢変化の状況を明らかにした。

日本語において親族呼称はこれまでも次々と置き換えられ時代による変化が激しい。比較的安定した1960年代以降でも、母親の呼称にゆるやかな変化が認められた。こうした変化は今後も続くであろう。東京都においては当面、子供たちによる「ママ」の普及と「おかーさん」の衰退がどうなるかが注目される。継続的な調査により変化をとらえ続けることが望まれる。

注 本調査は、JSPS 科研費 JP18H00673（研究課題「共通語の基盤としての東京語の動態に関する多人数経年調査」；研究代表者・尾崎喜光）による調査研究の一環として実施したものである。

参考文献

- 井上史雄 (2015) 「「お父さん」の記憶時間－グロットグラムによる地域差と年齢差－」『社会言語科学』 18-1
- 二 尾崎喜光 (2018) 「現代日本語における親族呼称の時代変化と加齢変化」『ノートルダム清心女子大学
一 紀要 日本語・日本文学編』 42-1
- 柴田武・鈴木たか (1959) 「「母」と言うようになるまで」『言語生活』 98
- 清水康行 (1987) 「オトウサン・オカアサン－近代の親族称呼－」『国文学 解釈と鑑賞』 52-2
- 平山輝男編者代表・秋永一枝東京都編 (2007) 『日本のことばシリーズ 13 東京都のことば』 明治書院

宗武朝子 (1978) 「母親の名前」『月刊 ことば』 2-4

鎌水兼貴 (2021) 「広がる関西弁～国語研の調査データを使ってみよう～ 「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」のデータ公開」国立国語研究所研究情報誌編集委員会編集・国立国語研究所発行『国語研 ことばの波止場』 9

(おざき よしみつ／本学教授)

キーワード＝子供語、成人語、無作為抽出多人数調査